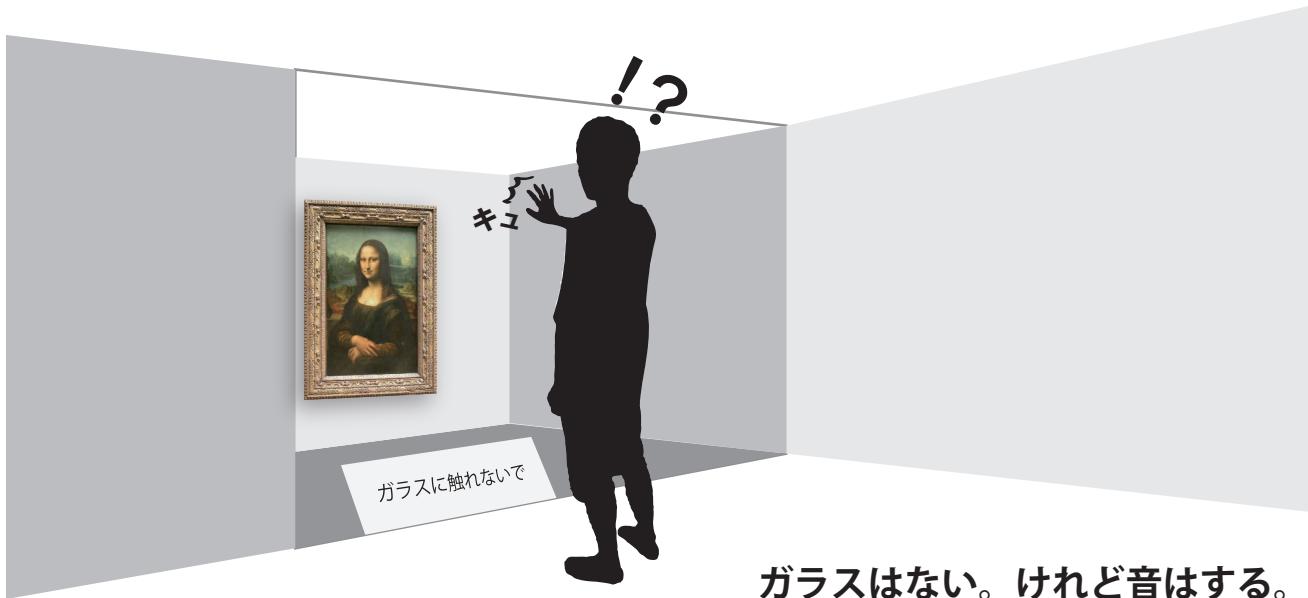


show window ?

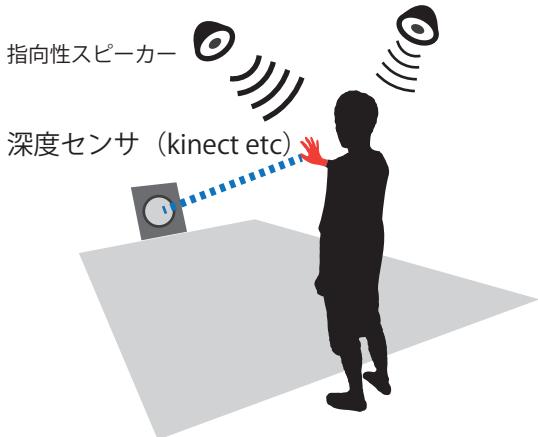
09222014 曾根光揮



ガラスはない。けれど音はする。

展示スペースのような空間に「ガラスに触れないで」と書かれている。しかしガラスはどこにもない。人は自然に手を伸ばす・・・まるでガラスに触れているかのように音だけが返ってくるインсталレーション。

技術仕様

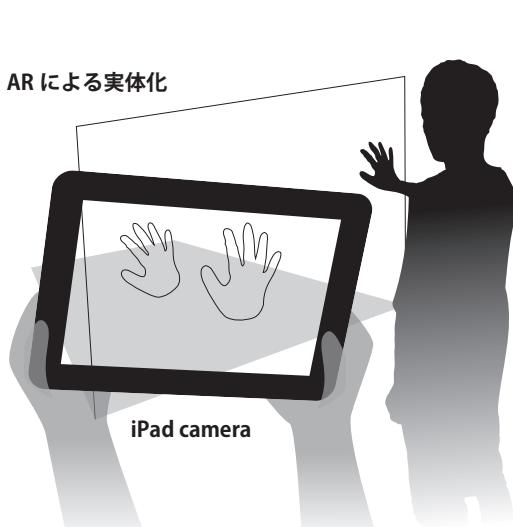


深度センサを用いてある一定の z 深度に達した部分を検出し、座標を取得する。それに応じて指向性スピーカーの音を調整し、体験者に向けて鳴らす。

さらに、ノックする・手のひらでたたく・こするといったジェスチャーを検知することでそれに応じた音を鳴らす。

体験者はまるでガラスが目の前にあるのに、すり抜けてしまう不思議な感覚を体験できる。

規格の独自性



今回、似たような事例を見つけることはできなかったが、「見えない壁」という企画自体は単純であり思いつきやすいものである。独自性を出すために、いかに触れたいと思う状況を作り出し、さらにリアルなレスポンスがあるかに重点を置いた。展示スペースのようなガラスに隔てられた空間の向こう側は、中へ入り込めたらという感情を掻き立てる。さらに指向性スピーカーにより、体験者自分のすぐ手前で音が鳴っている錯覚を起こす。

また、iPadなどのデバイスから、ARなどの技術によって壁に触れた手の跡が再現されるといった仕掛けも検討中である。確実に存在する見えない壁を強く意識させる演出として期待できる。